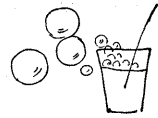


## 星をみる会



もう数年も前のこと、「星」をテーマに夜の保育をしたことがあります。それは、今でも思い出す度に、その時のようすがありありと浮かんでくる程とても印象深いものでした。

ちょうど運動会を間近に控えていた頃（十月）のこと、私たちは毎日その準備に追われ、家路につくのはいつも日暮れという日が続いておりました。七時を過ぎるとあたりはもうすっかり闇につつまれ、ただ星だけが明るく輝き、よくパスを待ちながら、今迄気付かなかった星空を見上げてはその美しさに一日の解放感を味わったものでした。ちょうど折りもおり、「今世紀最大のジャコビニー流星群来たる」、「北の夜空に展開する絢爛たる星のショー」という新聞記事が話題を集めておりましたので、夜空の星をみるたびに來たるべき流星群を想像して心はずませ、子どもたちにも是非こんな素晴らしい自然との出会いを体験させたい、という願いが「夜の保育」の実施にふみきらせたのでした。実施日は、当然のこ

## 波田野 佳代子

とながらジャコビニー流星群來来の日と決まりましたが、流星群が現われるのは午後九時すぎということでしたので、希望者のみ、親または家族同伴という形をとることにしました。この試みは初めてでもあり、夜遅いことでもあり、そして歴史的な現象と結びついた保育でもありましたので、現職の先生方で行っている「動きながら保育を考える会」のメンバーやその友人等にも協力して載って実施できました。それは、夜の保育をより一層効果的なものにしたと思います。一家団らんの間をさいて、いったい何人のお母様方が子どもを連れて来て下さるか不安でしたが、結局、全園児の三分の一（二十数名）が参加することになりました。

当日の模様を簡単に紹介してみましょ。会場は、北の空を一望におさめることのできる、幼稚園の裏山を登りつめた所にある刈田。座席は、枯草のじゅうたんを敷いた畦道。舞台は田んぼ、刈られた稲の小山が舞台のそで。夜目にはこれ

でも立派な大劇場です。時間は午後九時から一時間。プログラムの中心は、何といつてもジャコビニー流星群の観賞ですが、それをより印象深いものにするため、絵本「星になった竜のきば」(中国民話・君島久子再話)のお話を、パントマイムとペープサート(夜光塗料使用)とを合わせた劇にして、研究会のメンバーに演じてもらうことになりました。その他特別参加で、男子高校生がギター、他の園の先生がフルート、短大の先生がアコーディオンと照明係を担当して下さり、私共の園の職員(三人)が誘導、進行係を担当しました。

いよいよ当日。メンバーはリハーサルをし、自分の役割をかみしめるようにして時が来るのを待ちました。八時半を過ぎる頃、体験する未知の「何か」に向かう時の新面目な顔つきで三々五々集まってきました。

午後九時、みんなは自然がつくった劇場へ向かって出発です。星の歌をうたい、前後で声をかけあい、心を高めながら歩きます。「おーい、おーい」と追いかけて来た人も席が決まり、落ちついたところでみんなの明りが消され真暗になると、代って二つのサーチライトが夜空に向けてパッと輝き出します。サーチライトの先には、大きな星が点々と輝き、「あつ、あの星が一番大きいよ」「こっちにもある」「お星様

はどんなふうに見える?」「ピカーッ、ピカーッしてる」

「でも遠いんだもん」とのやりとりが自然にはじまります。

「星に名前がついているのを知ってるかな」「うーんと、わかない」「七夕の時出る星は何だったかな」「ああ、織姫と彦星」と思い出したように言う。子どもたちの所々に座っている他の先生や大人の方からは、北斗七星やカシオペア座の名

が出、それらがどこに見えるかサーチライトで捜していきま

す。「今夜は何という星をみに来たのかな」「えーと、ジャ、ジャコビ何とかって言うの、むずかしい!」「ジャコビニー

流星群ね」「そう、それっ」「見えるかしら」、再び上を向い

て捜している間に、「あー上ばかりみて首が痛いよ」とい

う言葉が出てきたので、フルートに合わせ「……ピッカー、

ピッカーふえてくる」の歌をうたうことにします。天に届か

んばかりにうたったのに、その頃から雲が出はじめ、どうし

ても流星群は姿をみせてくれません。そこでとっておきの劇

を始める事にしました。物語は――

「昔、子どもが欲しいと望んでいた老夫婦に男児が授かり、

その子は遅しく育ち、サンと名付けられた。その頃、南山と

北海に竜がいて、二匹はある時桃の実をめぐって争い、天を

破ってしまった。おかげでサンの住む村には雹や石が落ちて

きた。サンは人々を救うべく立ち上がり、ライロン山の老人を訪ね案を授かった。苦難の末ウリユー山に辿り着き、山を揺り動かしてとうとう三番目の姫を得て、共に白い羊に乗り、竜を退治し、その牙や歯で天の裂け目を繕いながら空を飛び続け、それが銀河や星になった」というものです。

真暗な舞台に立つサンや人形は、サーチライトのスポットライトを浴びると一層素晴らしく、ギターの音色も効果的で、子どもたちは竜の真に迫った動きにこぶしを握り、ライロン山やウリユー山が揺れる毎に目を輝かせている様子が夜目にもはつきり見てとれる程です。二十数分間の、年少児には長すぎはしないかと思つた劇もあつたという間に終わりましたが、肝心の流星群がどうしても雲の中から現われてくれません。それで、夜も更け少し寒くなったので、楽隊を総動員して、運動会で好評だったフォークダンスを輪になって踊り、おやすみの挨拶をして解散することにしました。後片づけをして幼稚園へ向かう私たちも、余韻を楽しみながら歌をうたい、フルートを奏でながら坂道を下って戻りました。

翌日、幼稚園では先生たちが昨夜の会に参加した子と、できなかつた子との出会いをどう捕えて展開するかに配慮しました。けれど、私たちが考えていたより、子どもたち同士が

とても和やかに、真剣に交換しあつていたのでした。昨夜の物語の大方の筋をつかんだ年長児は、語り手となり、幾人かはサンや竜の役を自由に演じています。昨夜とは違った雰囲気を楽しむ子、時々「そこは足をどんどんさせて体当たりよ」と演出する子、初めてみる子は、隣りに座つた年長のお姉さんの解説も合わせ聞きながら楽しんでいきます。観客も次第にふえ、その日はクラスの枠もはずしてみんなで劇あそびをして過ごしました。

「夜の保育」を思いついた時は、期待と不安感で一ぱいでしたが、みんなで心と力を合わせ、綿密な計画をたて、準備をすすめている間に不安も解消して期待だけがのつていきましました。あいにく流星群という未知の自然現象を観る事はできなかったけれど、これを機に親子で天体について語り合う時がもたれ、自然に対する未長く続く関心が育つたのではないかと思います。星は出なかつたけれど、参加した人みんなが楽しく過ごせたことですっかり満足して「さようなら」と言う事ができ、ほっとしました。

少なくとも私には、あの「星をみる会」は、文字通り光り輝く星となつて心の中にくらめいております。

(元・郡山市富田幼稚園)